

地域 (生活の場) をどう見るか: 風景の観察を通して

主題:

「今回のワークショップでは、地域/地域の豊かな資源を見つめる方法とそれを図工に生かす方途を皆で考えます」(多摩地区図画工作研究会による趣意文より)。以下、「地域/地域の豊かな資源を見つめる方法」についての説明と、「それを図工に生かす方途を皆で考えるための情報提供および仮説の提示を行います。

1. 地域/地域の豊かな資源を見つめる方法について
2. 地域/地域の豊かな資源を見つめる方法を図工に生かすには?

1. 地域/地域の豊かな資源を見つめる方法について

1-1 なぜ地域/地域の豊かな資源を見つめることが必要か?

1-1-1 自然と人間の生命の関係を確認する

私たちは、私たちの (外界) 環境と関係を持つことで、生きることができます。具体的に、私たちの生命に欠かせない水や酸素、そして食物とする他の生物は、生態系と物質循環が健全と保たれることで得られます。私たちは、生態系と物質循環を内包する環境と良好な関係を保つことで、自らも健康に生き続けられます (図 1)。



図1 国際連合が主唱する生態系サービス (生態系から人間が得ている便益)

1-1-2 自然、社会と私たちの生き方の関係を確認する

しかし、私たちは、生物多様性の喪失や気候危機の増大を招き、そこからの方向転換がなかなか行えない社会をつくってしまいました。

私たちには、自分の生活の中でも、買い物に際して何を選ぶかからどの仕事を選ぶか、また選挙に際してどの党のどの候補者を選ぶかまで、自らもさまざまに社会に関与できる可能性があります。ところが、(買い物や就業を不自由にしているのは、市民の「自己責任」以前にはなく労働政策などの政治の問題であるわけですが) それらは十分に行われず、今日の状況を招くに至っています。

1-1-3 地域の自然、社会と私たちの関係を改めて見出だす

私は、これらの問題を少しずつでも解決に向かわせていくためには、第一に私たちが自らと環境 (大きく分けて自然と社会) との関係を改めて見出だしていく必要があると考えます。そのためには、世界の自然と社会の問題と人間の関係について自分の関心に引きつけて意識し直す、あるいは学び直すこと、そして、自分が生活する地域の自然や社会を、自分と世界のつながりを実感できる入り口、接点としてはっきりと認識できるようになることが肝要ではないでしょうか。

1-2 地域/地域の豊かな資源を見つめる方法について

とはいえ、自らが生活する地域の自然（物質循環に切れ目はなく、都市化された地域も大きくは自然の一部であるとする見方も、上記の問題の解決のために肝要と考える）や社会を深く見つめ直し、総合的に正確に評価することは、当の地域があって然るべき日常を生きる場であるだけに、およそ誰にとっても難しいと思います。

私は、ランドスケープデザイナーという職業柄、ランドスケープ、すなわち地域の姿、景観または風景を通して地域をかたちづくるものやこと、そしてそれらの関係を読み解き、当地に求められる環境の計画、設計を、可能な限り地域に生活する人々と行おうとしています。その中で、地域をかたちづくるさまざまなものやこと、言い換えれば地域の豊かな資源と、それらの全体である地域を見つめることを目的として、踏査の折に写真を写すだけでなく、時間をかけて風景を観察するためにスケッチを描くことを重視してきました。

スケッチを描くにあたっては、風景をかたちづくるものやことをつぶさに見なければなりません。その過程で、自分が今までに当地や他の地域での経験や読書などから見知っていたことを見出だしたり、知らなかったことを発見したりすることができます。知らなかったことは、後日調べて絵に手を加えたり、絵のまわりにメモを書き込んだりしています（図2）。踏査と写真撮影、スケッチの他には、聞き取り調査や質問紙調査も行いますが、それぞれの調査結果からわかったことやわからなかったことについて調べ補うために文献調査を行い、これらを合わせて、風景の観察を通して地域の成り立ちが読み解けてゆきます。



図2 風景観察スケッチ「瀧の井。益子町七井」(廣瀬 2015)。台地斜面からの湧き水(井)の傍らに弁財天、台地の上に瀧尾神社を祀って信仰し、守り継ぎながら農業用水を得てきた場所で描いたものです。人体の60-70%を占める水は、海、空、地上と地下を巡っていて、環境を安定的に調整してあります。そうした水の巡りと人々による水利用、信仰との関係を読みとることができる風景といえます。

1-3 なぜ私はそのように地域を見たいのか?

ランドスケープデザインを職としたことも、風景観察スケッチを描くことも、子供の頃からの私の興味に基づきます。私は、4歳当時に雑木林に面した家に家族と移り住んでから、生き物全般に興味を持ちました。その後、さまざまな生き物を捕り、飼う中で、興味は淡水魚に落ち着きました。最初は、人工的に空気を水中へ送り込む方法を使って水槽にたくさんのお魚を入れて飼いましたが、動物行動学者コンラート・ローレンツの著書『ソロモンの指環』(日高敏隆訳、早川書房、1979年、総231頁)を読んで「調和水槽」について知り、魚と水草、甲殻類、貝類、微生物、酸素や二酸化炭素、アンモニアや亜硝酸などの調和関係にも関心が向くようになりました。

中でも印象深く感じたのは、コイ科のタナゴ類が二枚貝に産卵することです。タナゴ類が生きられるためには、彼らの餌である小型の底生動物や付着藻類などの他に、産卵をする二枚貝の生息に必要な環境が求められます。二枚貝が餌とする浮遊性の植物プランクトンが生育し、二枚貝が身を潜めるのに向く底質(砂底、泥底など種類によって異なります)があることで、必要な環境は整います。砂底か泥底かは、周囲の地形や水流、上流域の地質などに左右されます。そうすると生物学、生態学から地理学的なことへと、知らなければならぬこと、もとい知りたいことは広がります。植物プランクトンが光合成できるためには、水の透明度が確保されて日射が水中へ届く必要があります。そして、水の透明度は、周囲での人間の土地利用や水利用その他にも関係し、やがては国の特別天然記念物として絶滅危惧種に指定されたイタセンパラやミヤコタナゴを筆頭に、タナゴ類が全国で減少することになりました。これは、人間が引き起こした問題によります。

私は、こうした淡水魚の生息地保全による保護に携わりたいと考えるようになりました。今、ランドスケープデザインに携わっているのは、淡水魚が生息する湖沼や川からその周辺の陸域、農地や市街地、都市のあり方にまで問題意識を広げた結果でもあります(図3)。環境問題の解決は、対症的に行っても凶れません。問題の原因療法(根本治療)がめざされるべきで、そのためには地域の成り立ちを総合的に見て、読み解くことが求められると考えるようになりました。



図3 治水と生態環境の回復を合わせて目的とし、実現された「大柏川第一調節池 基本設計平面図」(廣瀬1999。市民提案作成にプロボノ活動として参加)

2. 地域/地域の豊かな資源を見つめる方法を図工に生かすには?

2-1 むしろ、地域を見つめるためには「手を使って思考すること」が必要では?

1-2 で、風景観察スケッチを行いながら地域を見つめる際に、「自分が今までに当地や他の地域での経験や読書などから見知っていたことを見出だしたり、知らなかったことを発見したりする」と書きました。「見知っていたこと」は、知識のたくわえに当たります。「知らなかったことを発見する」は、知識がなくて気がつく面もありましょうが、目に見えているはずでも知識がなくて存在を認識できないものやことやそれらの関係を見出だせるのは、感性のはたらきによると考えられます。そして、感性のはたらきが引き出されるために、手を動かすことは重要なのではないのでしょうか。

2-2 美術講義録を参考に

地域を見つめる方法を図工に生かすというよりも、地域を見つめるために図工に内在す

る「手を使って思考すること」が必要ではないかとの私の考えに重なるところがあると思う、美術講義録を参照します。アメリカの画家、教師（ニューヨーク・スクール・オブ・アート）、ロバート・ヘンライ（1865-1929）の著書『アート・スピリット』（野中邦子訳、国書刊行会、2011年）から、いくつか引用文を載せます。

「創作への動機がないのに技術だけ先に学ぶのは意味がない。技術的な小手先芸をたくさん身につけるよりも、すでに心のなかにモチーフをもっていて、そのために必要な手段を探すようにしたほうが創造力を育むにはずっとよい。いまの自分にすぐ必要な技術を学び、伸ばすのである。そうして初めて、技術は発想や感情の支えとなる。」[出典：ヘンライ同書、250頁]

「絵画とは、思想を普遍的な形にして表現することである。（中略）われわれをとりまく環境についての研究である。（中略）何かいいたいことをもっている人なら、それをいうための方法をきっと見つけるだろう。」[出典：ヘンライ同書、126頁]

言葉に表せることと、どうしても表せないことがあると思います。絵画やその他の表現手段には、それを補って「いいたいことを（中略）いう」ことを総合的に行えるようにし得る可能性が備わっていると考えています。それは、「手を使って思考すること」にも当たるのではないのでしょうか（図4）。

「むずかしいのは、表現することよりも、見ることである。」[出典：ヘンライ同書、95頁]

写真家アンリ・カルティエ=ブレッソンの著書から、重引になりますが以下の文章を引きます。「トルストイは『戦争と平和』の中でこう書いている。『どんなに長い時間をかけて丹念に時計の針や、蒸気機関車の安全弁と車輪、樫の木の芽を見つめても、私には鐘が鳴る理由も、蒸気機関車の動きや春風がそよぐ理由も分からない。それらを理解するには、視点をがらりと変え、蒸気、鐘、風の動きの法則を学ばねばならない。（中略）』（第三編、第一章より）」[出典：アンリ・カルティエ=ブレッソン『こころの眼—写真をめぐるエッセー』堀内花子訳、岩波書店、2007年、55-56頁]

カルティエ=ブレッソンは、こう続けます。「一瞬のまばたきから生まれる写真（中略）しかしそれは、周到な準備や経験とは相容れないものだろうか。長年同じ場所に腰をおちつけると、みずみずしさとは失われてしまうのだろうか。そうではない。その土地に住んで

いようといまいと、ある国、あすシチュエーションを表現するために必要なのは、その土地の人々がつくるコミュニティとあらかじめ何らかの密接な関係を築き、支えにすることだ。生きるには時間がかかる。根はゆっくりとはる。すると瞬間は長い年月に培われた理解の、あるいは驚きの果実になる」。[出典: カルティエ=ブレッソン同書、57-58 頁]



図 4 “Volga Boatmen” picture by Illia Repin (1870-1873)/ photo public domain in Wikimedia Commons.
[https://en.wikipedia.org/wiki/File:Ilia_Efimovich_Repin_\(1844-1930\)_-_Volga_Boatmen_\(1870-1873\).jpg](https://en.wikipedia.org/wiki/File:Ilia_Efimovich_Repin_(1844-1930)_-_Volga_Boatmen_(1870-1873).jpg) (イリヤ・レーピン「ヴォルガの船曳き」)。レーピンは、船曳きの労働を描く作品を構想し、1870年、ヴォルガ川流域に滞在して船挽きの野営地や彼らが働く浜、浜へ注ぐ川の上流域、彼らの一人ひとりの準備素描を行い、土地や労働や個々人の個性を体感的に、総合的に知覚、理解して彼らを描こうと試みました。その絵は、1871年に公開されて高く評価されたそうですが、レーピンは主題の立て方とこれに基づく人々の描き方について反省し、1872年に再びヴォルガ川流域を訪ねて絵を描き直し、1873年3月に改めて作品を発表したとのこと。主題の根本は変わらず、「上流階級が民衆に負っている払いきれない負債」に関係していましたが、それを表現するために一まとまりの船曳きの「過酷な労働と憔悴した雰囲気という全体の印象」を描き出すことから、「各々の船曳きの個性を描出すること、それぞれの物語を構成することに移」されたのだといいます。彼が本作のために考案した体感・体験を含むがゆえに総合的な絵画制作方法は、言葉に表せることから、どうしても表せないことまでを包括して「いたいことをいう」こと、「手を使って思考すること」の好例と考えられます。[出典: 『国立トレチャコフ美術館所蔵 レーピン展』アートインプレッション、2012年、総223頁]

ヘンライの指摘「むずかしいのは、表現することよりも、見ることである。」に戻ります。「見ること」、そしてその上に「表現すること」のために必要なことに、カルティエ=ブレッソンは「周到な準備や経験」を加えています。これらの大切なことどもを、一連の流れに組み上げることを試みてみます。知識をたくわえ、技術を「発想や感情の支え」とし、地域に出てじっくりと風景を観察し、人々と関係を築くことをあわせて地域を経験し、そ

の中で「手を使って思考すること」を行い、感性のはたらきを生かし、「いいたいことを (中略) いう」「表現する」ところに達する…そのように、地域を見つめるために図工に通じることは生かせ、地域を見つめる方法を図工に生かしてゆけるように、私は考えます。

2-3 地域と図工を結ぶ際の留意点として考えられること

ただし、地域を見つめるために「知識をたくわえる」といっても、それでは動機付けになりにくいように思います。1-3 に書いた私の例を思い出していただきたいのですが、およそあらゆるものやことは他のものやことと関係し合っていて、それらを私たちは環境や世界と認識しています。その中の、河川流域のようにある物質循環の単位と考えられる範囲や、それを基本として定められたかつての村の範囲やその集合体として今日ある地方公共団体の範囲などを、私たちは地域ととらえています。そうした地域と図工を結ぼうとする際、子供たちがまず興味の対象を見出し、他のものやことを一つでも二つでも関係づけて地域を見つめ、「手を使って思考すること」を試み、「いいたいこと」を見つけて余すところなく「いう」「表現する」ことが実現できるよう、手助けをされることは大事ではないでしょうか。

おわりに:

「子供たちが感性と知識を合わせて生かしながら地域を見て、その先に世界を感じ、あるいは見ることを支える営みは、他の教科にも期待されます。しかし、そのことは、特に図工には、より明確に期待されると思います。自らと、自らが生きる世界、環境との関係を見つめ直し、確かめ直すために、言葉に表わせることと表せないことを合わせた、総合的な、「手を使って思考すること」が、図工には求められると考えるためです。

参考:

東北風景ノート | 図工から身のまわりの世界へ: 東村山市立南台小学校 展覧会に寄せて

<http://shunsukehiroze.blogspot.com/2019/12/feel-familiar-world-from-drawing-and.html>

*NPO 法人アートフル・アクションと同小学校が主催した勉強会での発表記録です。